

きょうの
テーマ

エーアイ 続々進化

中国の参加 世界が注目

なるほど!



しゅざい
取材
ノート

ドキドキ

知ってこ用語

AI プログラムによって人間の知能を人工的に再現する技術で、1950年代から研究されてきました。2010年代に人間の脳の働きを模した「ディープラーニング」という技術が誕生し、飛躍的な発展を遂げました。



中国発の生成AI「ディープシーク」のアプリ画面
チャットGPTを活用した神奈川県横須賀市の応対ボット

対話型AIの登場により、AIは私たちにとって身近な存在になりました。神奈川県横須賀市は全国で初めて、市民からの問い合わせ業務にチャットGPTを導入しました。チャットGPTを活用して質問に答える応対ボットを開発。職員の負担削減につながっています。他の自治体にも広がれば、AIが私たちの生活により深く関わってくるかもしれません。しかし、手軽に使えるからこそ気を付けなくては

チャットGPT 市役所業務に活用も

けない点もあります。その一つが著作権の問題。AI開発では、AIを賢くするためにインターネット上にあるデータや本、映画などを活用することが多いです。その学習データに著作権が生じるものが利用されていれば、AIが作った画像や映像も著作権に触れてしまう可能性があります。実際にアメリカなどでは、AIと著作権を巡った訴訟が何件も起きています。



回信憑性のある情報

こんにちは！私はチャットくんです。
私は横須賀市のチャットGPTの取り組みについてお答えするチャットbotです。

いまはまだ答えられない質問もありますが、徐々に答えられるように、勉強していきます。もし上手く答えられないことが続いたら、画面を再度読み込んで（リロードして）くださいね。

最初にあなたのお名前（ニックネーム）を教えてください。

ディープシーク社が発表した新AIは、アメリカで開発された生成AI「チャットGPT」と同じ対話型のAIです。

人工知能(AI)の進化が止まりません。中国のベンチャー企業「ディープシーク」が1月、新しい生成AIを公開し、世界中で話題になりました。なぜ注目を浴びたのでしょうか。私たちが利用してもよいのでしょうか。(西浦梓司記者)

新AIが世界から注目を浴びた理由は、その開発費にあります。AIの開発には、AIを賢くするためのトレーニングにお金がかかります。ところが、ディープシーク社はそれまでの10分の1以下の費用で、新AIのトレーニングができたと言っています。さらに、中国はアメリカから貿易を制限されているので、AIの開発に必要な最先

端の半導体を輸入できなくなる。そうした不利な条件でも高性能なAIを開発できたため、欧米の研究者らが驚いたのです。AI開発におけるアメリカの立場がゆらぐ心配から、アメリカ株式市場のAI関連の株価が大きく下がりました。この経済の動きは「ディープシーク・ショック」と表現されました。

情報漏れる？

世界に衝撃を与えた新AIですが、情報が漏れるリスクが指摘されています。ディープシーク社の説明では、生年月日や電話番号などの個人情報報が集められます。集められ

た情報は中国国内で保存されるため、中国政府がアクセスする可能性もあります。また、中国と台湾の関係性など政治に関する話題を質問すると、正確な回答が返ってきません。新AIはこれらのリスクを抱えているため、トヨタ自動車や三菱重工業など日本国内の大手企業では、社内利用を禁止しています。AIに詳しい愛知淑徳大学の浦尾彰准教授は「どのようなAIであっても、個人情報扱われ方や回答の正確性などを理解した上で利用しないほうがいいかもしれません。AIは便利なものですが、今まで以上にネットリテラシーが求められています」と話しました。



記事を読んで
考えよう!

- 〈1〉 AIを利用するときに気を付けたいことは?
- 〈2〉 身近でAIが活用されている事例を調べてみよう

B5判
ノートに
横向きに貼れるよ

都道府県
マップ



田沢湖の水深423.4m 日本一

秋田県仙北市の田沢湖の水深は423.4m。日本で最も深い湖です。湖面は、季節や時間によってさまざまな色を映し込みます。周りでは電動キックボードによる散策や、湖に飛び込んで体を冷ます「テントサウナ」などが楽しめます。

